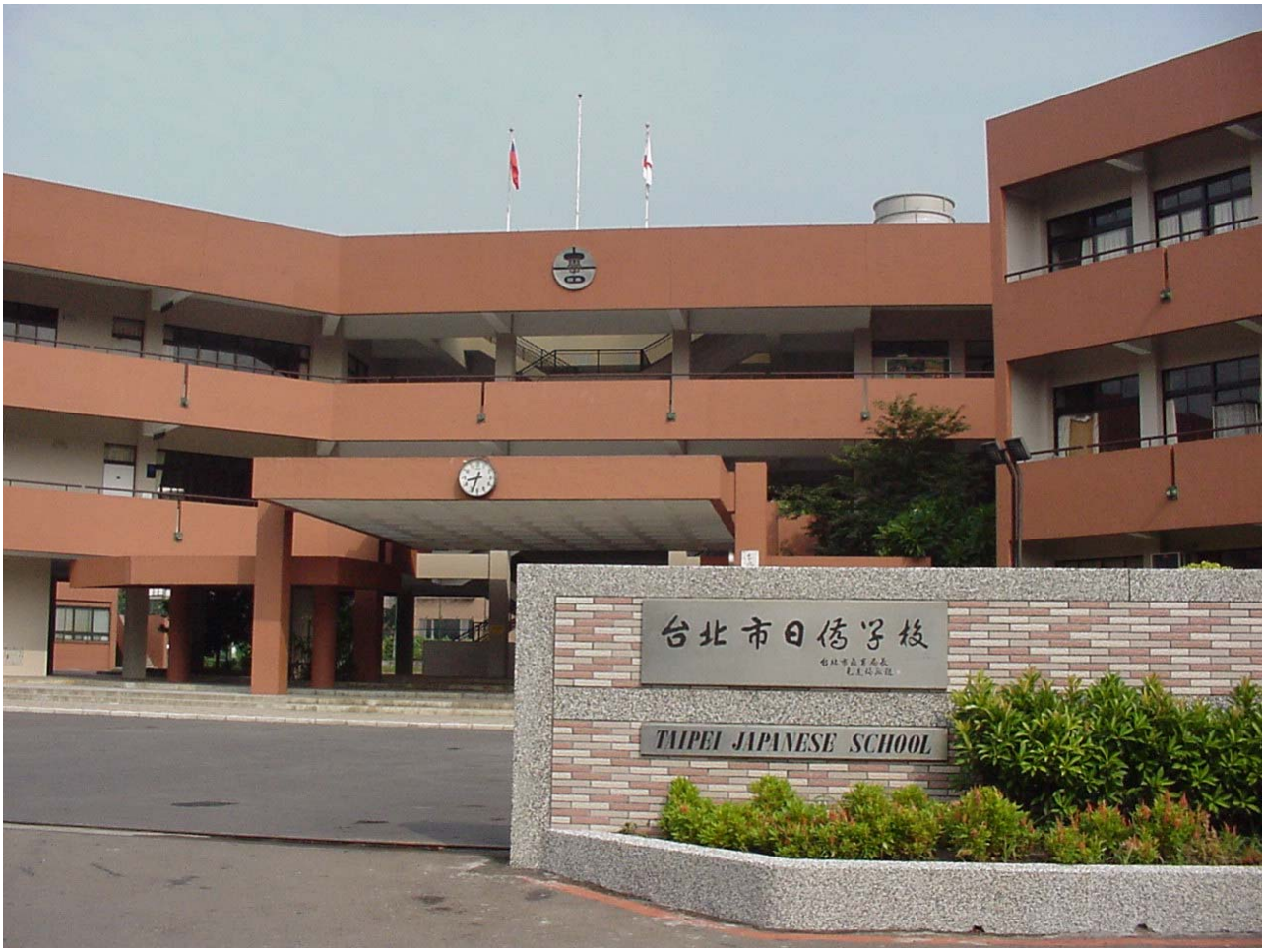
帰国報告書

平成１４年度～１６年度「台北日本人学校」派遣教員

中村直之（現：登別市立登別温泉小学校　教頭）



台北日本人学校

〒１１１
中華民国（台湾）　台北市 士林區 中山北路６段７８５號

Tel. (02) 2872-3811, 3801　　Fax. (02) 2873-6744

E-mail ： taipeijs@ms4.hinet.net

Ⅰ　学校教育に関わる内容

1. 台北日本人学校の概要

（１）概要

沖縄県与那国島のすぐ近くにある台湾。その中心都市、台北市は人口約２６０万の近代都市である。日本人学校はその中心部から約１２ｋｍ北に位置する天母という街にある。天母はもともとのどかな田園地帯であったが、日本人学校、アメリカンスクールが設置されると、そこに子どもを通わせる外国人が多く住み着くようになり発展した。今では日本語、英語、中国語の飛び交う、国際色豊かな街になっている。

日本人学校は、その天母の中心、中山北路と天母路が交差した場所にある。全校児童生徒は８００名強、小中併設校としては、世界で５番目の大きさとなっている。

東南アジアにある多くの日本人学校と同じように、国際結婚家庭の子ども達が多いということが特徴の１つとして挙げられる。台北日本人学校は中でもその割合が多く、３割～４割の子ども達が国際結婚家庭である。そのため、特に低学年においては、中国語の方が得意であるという子もいる。こうした子に対しては、授業からの取り出しや放課後の補習によって、日本語指導も行っている。

（２）特色ある教育活動

特色ある教育活動としては、総合の時間を使っての「中国語」、「英語活動（英会話）」、「交流会」を挙げることが出来る。（低学年においては、「中国語」「英語活動」については、学校裁量の時間で、「交流会」については生活科で行っている。」

①　中国語

中国語は全ての児童生徒に対して週に１回１時間の授業を行っている。自作の教科書を使い、日本語の話せる現地採用教員が行う授業である。小学部においては、日常生活や校外学習で中国語が使えるような具体的な場面を想定した授業を行っている。小学部６年および中学部では、より高度な会話能力を身につけさせる為に、能力別の授業を行っている。

②　英語活動（中学部：英会話）

英語活動は、小学部１学年から６学年までが行っているものである。週に１回１時間（低学年は月１回）、ネイティブのＡＬＴおよび担任のＴＴによる授業が行われている。中学部においては、週１時間英会話の授業を行っている。中国語の授業同様、能力別に３クラスに分けてＡＬＴによる授業を行っている。天母地区は中国語だけでなく、英語を話す人も多い。また、アメリカンスクールもすぐ目の前にあるということで、英語への関心は、児童・生徒ばかりではなく、保護者においても相当高い。したがって、英語活動への期待はかなり大きい。

③　交流会活動

交流会活動は、現地校との交流を軸に現地理解教育を行っていくものである。交流会は決まった現地校と１年おきにそれぞれの学校を招待するという形で行っている。例えば、今年度日本人学校の１年生が現地校を招待したなら、来年度は日本人学校の１年生は招待されるというやり方である。この活動はおよそ２０年の歴史があり、現地校との恒例行事となっている。日頃学習した中国語を試す場であり、台湾への興味関心を高めたり、台湾についての理解を深めたりする場でもあるので、重要な役割を担っている行事である。また、交流会ではないが、毎年、鑑賞教室を実施している。原住民の踊りを披露してもらったり、中国の伝統的な人形劇の鑑賞や人形の扱いを教わったりし、交流会同様、台湾理解につながっている。

（３）その他の特色

①　保護者同伴

小学部においては登下校は保護者同伴の必要がある。台湾は比較的治安の良い地域であるが、それでも誘拐事件などは日本よりも多く、保護者同伴をお願いしている。放課後は学校で遊んで良いことになっているが、保護者監督の下という条件がある。学校への出入り口は正門のみであり、守衛が常駐している。学校へ入る場合は、保護者証を見せるか台帳に名前などを記入することが必要になる。

②　弁当

給食はなく、原則として弁当持参である。特に、弁当は家庭からの持参だけではなく、マクドナルドや外食弁当の業者に注文をして購入することも認められている。そのため４時間目が終わると、玄関近くの弁当引き渡し場所には多くの子どもたちが並ぶことになる。

③　転出入

転出入者がとても多い。特に小学部低中学年では、およそ３割の児童が入れ替わることもある。そのため、１年間を見通した学級経営というよりは、学期ごとの勝負になるといった感はいなめない。

④　小中併設校

小中併設というのも特色の１つといえる。運動会や学習発表会では小学生と中学生が協力しながら計画を立てたり、運営したりしている。委員会活動でも、放送や図書当番など連携を図りそれぞれの分担での仕事を行うこともある。

2. 台北日本人学校の歴史

台北日本人学校が開校したのは、１９４７年５月である。台湾大学独身宿舎を借りてのスタートであった。当時の名前を「国立台湾大学付設留台日籍人員子女教育班」と言い、小学部約５０名、中学部４０名からなっていた。

４年後の１９５１年に大学の都合により独身宿舎を返却することになったが、かわりに台湾大学の教室を借りることが出来るようになった。ただし、この頃は中学部は廃止、小学部は５～１０名程度の児童が在籍するのみとなっていた。

その後、次第に児童の数は増加してきた。そのため１９５９年頃からは人数にあった場所を探しながら、転々と移ることになる。そして１９８３年にやっと現在の天母に新校舎を建設することができた。

天母に移ってからの児童生徒の増加は著しく、１９８８年には１０００名を越すマンモス校となった。現在は児童生徒数はやや減ったものの、プール、体育館、コンピューター室、ＬＬ教室などが整備され日本と同じような環境での授業が行えるようになっている。

各界著名人の訪問が多いことも本校の特色と言える。我々の在任中では、２００３年３月には前総統 李登輝が講演を行った。また、同年７月には中國信託董事長 辜濂松が中学生を対象に講演を行った。

3. 施設紹介（写真）

運動場

ラバーコート

体育館

プール

コンピューター室

図書室

スクールバス

水辺公園

4. 国際家庭児童・生徒の教育に関して

台北日本人学校での教育に関わって、最も特色あることは、「国際家庭児童・生徒」に関するものである。以下に報告したい。

（１）在籍状況について

現在、台北日本人学校に在籍している国際家庭の児童・生徒数は、全体の約３０～４０％となっている。つまり、約８００人の児童・生徒のうち、３００人前後が国際家庭の児童・生徒である。この実数は世界の在外教育施設の中でも特に多い方だといわれている。

また、ほとんどは父親が日本籍、母親が台湾籍となっている。逆のパターン（父親台湾籍、母親日本籍）の子どもたちの場合は、多くが台湾の現地校に通っているようである。保護者との同居状況を見てみると、約７割は両親と台湾に居住しているが、その他は、どちらか片方の親と同居しているか、場合によっては両親と同居しておらず、親戚のところに預けられている。特に、母子家庭の割合が高いのが目立つ。

（２）国際家庭の児童・生徒の傾向

台湾での生活が長い子どもが多い。生まれたときからずっと台湾で生活しており、日本を知らないという子どもも相当数いる。

性格的には明るく素直な子どもが多い。誰に対しても開放的で、いろいろな活動に積極的に関わろうとする。中国語が堪能な子どもが多いので、台湾現地の学校との交流会や校外学習などでは、通訳として活躍する児童・生徒も多い。

（３）保護者の傾向

情に厚い台湾人の性格から、学校に対して協力的な保護者が多い。一方で、特に母子家庭においては、保護者が仕事を抱えており、学校の活動にほとんど姿を見せない家庭もある。また、台湾の教育しか経験したことのない保護者の場合、日本の教育方針に戸惑いを感じ、学校側との距離を埋めるための時間がかかる場合もある。

多くの家庭は日本の教育を受けさせたいという目的で、日本人学校に子どもを入学させている。一方で、台湾が生活の基盤になっているにもかかわらず、日本国籍を子どもに取得させ、日本人学校に通わせている背景には、台湾をとりまく政情が不安定であるという現実が横たわっている。また、有事の場合に備え、他国でも生活できるカードをしっかり握っておきたいという気持ちから、国籍のことだけではなく、英語・中国語を含めた言語習得にも大変熱心な傾向がある。時には、日本人学校を日本語学校と勘違いして入学を希望する家庭も、希であるが見られる。

（４）教育上の課題など

①　日本語習得

台湾で生まれた子どもたちの中には、日本語の習得が十分ではない者もいる。特に小学校入学時に、日本語がまったくといってよいほど話せない子どもが、毎年数人ずつ在籍している。学校でも補習の態勢をとっているが、生活言語が中国語という家庭も多く、しっかりとした習得には家庭の協力が不可欠である。在籍中にめざましく進歩する者もいるが、習得が不十分で学習全般に影響の出ている子どももいる。

また、日本語の習得が不十分なために、他者に自分の意志をはっきり伝えることがでないために、周りの子どもたちとの間でトラブルが発生することもある。

②　進路

中学卒業後の進路は、主に、日本の高校への進学と、台湾の高校への進学に分かれる。ここ数年、台湾の政情が安定し、高校側の受け入れ態勢が整ってきたこともあり、台湾の高校へ進学する割合は増加している。過去３年間では、中学を卒業した国際家庭の生徒のうち約半数が台湾の高校に進学している。また、経済的に余裕のある家庭の場合には、海外の上級学校に進学する場合もある。

選択肢が多岐にわたるということは、自分にあった進路を幅広く選べるということでもあるが、一方で、進路をなかなかしぼりにくいという現象にもつながってくる。日本人学校に長く在籍していればしているほど、卒業後、日本の高校に進学したいという希望がふくらむ子どもは多い。しかし、経済的な理由や複雑な家庭環境などからそれが難しい家庭も数多くある。両親が日本人の家庭に比べると、進路指導・進路選択の持つ重みは桁違いに大きいといえる。

（５）学校体制について

国際家庭の子どもたちが、安心して、また将来に希望を持って生活できる学校環境を整えるため、それぞれの教員が、生活面・学習面・進路面など様々な角度から、課題解決に取り組んでいる。ここでは特に、国際家庭の子どもの教育に関わり、専門的に設けられた委員会の活動を紹介したい。

①　日本語補習

ア　日本語補習の必要性

現在、日本と台湾の交流は盛んで、日本国籍をもっている国際家庭の児童生徒も多数在籍している。その比率は、小学部では約３０％、中学部では４０％前後に上る。

日本人学校という名称の通り、台北日本人学校では文部科学省の学習指導要領に準じて日本語で授業を行う。そのため、学校では、入学願書受付時や転入学時に面接を実施し、児童生徒が学年相応の日本語を有し、学校生活を送る上で支障をきたすことがないかを見る。

しかし、入学後、日本語能力が不十分で日常生活において友達とのコミュニケーションがうまく図れない。また、教師の指示が分からなく学校生活の適応が難しいと心配される場合がある。そこで、日本語補習が必要となる。

イ　日本語補習の今まで

○平成１４～１６年度

１年生については国語の授業を時間割編成で同時間に設定し、国語の授業時間に３名の教師が入り込む形

を取った（１年生対象児童は１２名、指導者は学部主任と日本語担当教員、現地採用教員）。これは、少人数での取り出し授業では、児童に与えるマイナスの心理的影響が大きいこと、高め合う、参考にするなどの学習効果が得にくい。そして、本年度の児童の実態を考えてのことである。また、日本語担当教員として１名増員されたので、２年生の対象児童に対しても、国語の授業に入り込み、支援していった。３年生に関しては、週１時間放課後補習を行った（対象児童５名）。

②　国際家庭の児童・生徒の教育に関する委員会

国際家庭の児童・生徒に関わる課題などを総合して取り扱っている。活動は、課題の集約の他、年２回の保護者会の開催、教職員を対象にした研修の企画などである。保護者会では、生活・学習上の課題について話し合ったほか、特に台湾の高校に関する進学情報の提供を行っている。

5. 台北日本人学校の危機とその対応

Ⅱ　台湾での生活

1. 台湾の概要

（１）台湾の文化、歴史、位置など

一般に台湾と呼ばれているが、正式には「中華民國」が国号である。孫文による辛亥革命で成立したアジアで最初の共和国である。中国の代表権問題がからむため、通常国連加盟国の間では、Ｔａｉｗａｎの名称が使われている。オリンピックなど国際的な競技会などでは、「中華台北(チャイニーズ・タイペイ)」の呼称が定着している。

国内では「民國」という年号を使用しており、辛亥革命の翌年元旦の１９１２年１月１日が開国記念日と制定されたので、この年が民國元年にあたる。（ちなみに２００５年は民國９４年）

人口は、２２００万人を超える。１平方キロメートルあたりの人口密度は６００人を超え、日本の２倍近くで、アジア第３位である。大多数の漢民族のほかに、先住民族が住んでいる。宗教は仏教と道教、儒教が

渾然一体となった多神教で、キリスト教などの信者も多い。台湾全島に寺廟、教会が８千カ所以上ある。標準語は中国語（国語＝北京語）で、その他に台湾語、客家語など、原住民にもそれぞれ独自の言語がある。日本統治時代に日本語教育を受けた６５歳以上の年輩の方は日本語も話すことができる。

アジアニーズの中でも、国民の勤勉性と近年では大陸経済との関係強化により、ここ数年際立った経済発展を遂げている。一人あたりの GDP は、アジア諸国の中では日本、香港、シンガポールなどに次ぐ水準で第６位である。良質の製品を日本や世界各国に提供しており、東アジア経済発展の原動力になっている。また、日本は工業製品ばかりでなく、多くの農水産物の供給も受けており、今後もあらゆる面にわたる強い結びつきが予想される。

このような背景の下で、文化面・経済面で日本との結びつきはますます強くなり、日本の書籍や雑誌が多くの書店で販売されるようになった。新聞もその日の午後には配達されている。また、数年前から海外向けのＮＨＫ放送などをケーブルテレビで視聴できるようになり、日本人の家庭はもとより、多くの現地の人たちも受信している。また、アンテナとチューナーを用意して日本のＢＳ放送を受信している家庭もある。

（２）人口、民族

総人口２２５７万人（２００３年８月現在）１９４６年の６０９万人と比較すると３．７倍になっている。人口密度は１k㎡当たり６１７人で世界有数の人口過密地域である。民族構成は、漢民族が９８％を占める。中国大陸から移住した子孫である本省人と国共内戦に敗北した中国国民党政府と共に移ってきた外省人がいる。先住民族は、約３０万人。大きく１１族にわかれている。

（３）台湾の気候

台湾のほぼ中央部（嘉義）を北回帰線が通っていて、大部分は亜熱帯性気候。南部は、熱帯性気候となっている。一般に高温多雨で、気候は地域と季節によって異なる。５月～１０月までと夏期は長く、７月～８月には最高気温が３０度を超す。冬期は南北の差が大きく、最寒季の１月～２月の月平均最低気温は北部では１６℃前後、南部では２０℃。また冬期は南部が乾季であるのに対し、北部では雨の日が多い。

４，５月は、夕方になるとまるでスコールのような激しい雨が降ることが多く、校舎のＡ棟とＢ棟の間にある池が増水し、あふれんばかりということが度々あった。またその際、雷も鳴り響き、自動車の盗難防止のセンサーが誤作動を起こし、大きな音があちこちで鳴り出すことも多い。

１２月でも３０℃近くまで気温が上がることがあり、クーラーを稼働させることがある一方、翌日は一気に寒風吹きすさぶような気温に下がることもあった。

2. 学校周辺の様子

中山北路７段は、学校から北へ伸びる緩やかな坂道である。台湾銀行を皮切りにおしゃれなお店が続いている。坂を上るにつれて徐々に万年緑の山肌が見えてくる。陽明山である。この陽明山は、国立公園にも指定されており、休みの日には多くのハイカーで賑わう。

中山北路は、幹線道路としては、台湾銀行からら約４００㍍地点にあるロータリーで折り返している。このロータリー付近には、警察署・消防署があり、天母の街を見下ろすかのごとくにこの地に住む人々のくらしを守ってくれている。ロータリーから東へ５分ほどの所には、緑豊かな天母公園がある。この公園は、天母地区に住む人々の憩いの場所でもある。朝は、毎日太極拳やスポーツを楽しむ人々が多くいる。また、この付近は露天の朝市が開かれいつも賑わいを見せている。

天母西路は、学校から西に延びる。マクドナルドやスターバックスコーヒーなどの外資系のお店をはじめ、洋服・カジュアルの先端を行くお店が数多い地域である。この道は、一車線の通りであるが、交通量は一日途切れることはない。天母西路を２００㍍ほどいくと天母北路に接する。天母北路は、陽明山に続く道で土日は、温泉や陽明山へ向かう車の往来も激しい。更に天母西路を先に進むと振興病院・栄總病院といった総合病院がひときわ目に付く。特に栄總病院は、アジア最大規模を誇る病院で屋上にはヘリポートまである。

天母東路は、中山北路をはさみ天母西路と反対に東に延びている道路である。この通り沿いも天母西路と同様にいろいろなお店が連なっている。通りに入って直ぐの所には三玉宮という道教の廟があり、いつも線香の臭いがしている。信仰心の厚い台湾人の一面が伺える。更に東へ進で行くと忠誠路にぶつかる。この忠誠路を南に行くと、広大な天母運動広場や日本対キューバがW杯で対戦した緑豊かな天然芝の天母球場がある。この一帯は夜間も照明でてらされウォーキングやテニス、バスケットボールなどを楽しむ多くの人々で賑わう。更に南へ進むと日系の高島屋デパートがある。値段はやや高めであるが日本のものが手にはいるので台湾人だけでなく日本人も多く利用している。

このように３年間勤務した台北市天母の街は、国際色と緑に満ちた素晴らしい環境の中にあった。また、台湾は、日本人が忘れかけた人情味ある伝統・文化がいたる所に見えかくれする、どこかなつかしさを感じさせる国でもあった。

台北日本人学校と隣接する国民小学校

（台北市立天母国民小学校）

我　愛　台北日本人学校！！

Ⅲ　おわりに

「近くて、近い国」と評される台湾は、決して日本からの距離だけが近いわけではありません。

日清戦争以後の日本統治時代の影響は、あらゆる面で戦後６０年近くたった今でも強くその色を残しています。異国でありながら、異国の感覚を感じさせないこの国には、日本以上の「日本」が生き続けています。例えば、電車やバスの中で日常的に、いや当然のように「思いやり」の姿が見られます。小さい子どもを連れていたり、年老いた年輩者がいたりすると、すっと席を立って「請坐下（坐ってください）」と自然に声をかける老若男女にいつでも会うことができました。また、道が分からなくて困っていますと、「どうしたの？」と流暢な日本語で声をかけてきて、親切に説明してくれる６０歳代以上の方々にも出会いました。日本人が忘れかけている「思いやりの心」を、この台湾の地で学ぶことができました。

そして、日本を離れて生活することで、台湾やその近隣諸国を理解することだけでなく、日本の文化や企業の進出ぶりを知り、日本や日本人の立場を考えさせられました。また、海外からどのように見られているかを考えたり気づいたりする日本理解の機会にもなったと感じています。台湾は極めて親日的で、気候や環境・物資などの面でも恵まれ、非常に過ごしやすい国でした。しかし、尖閣諸島の問題や日本の戦後処理の問題等で、日本人学校にデモが来たことも何度かあり、その対応に悩まされたこともありました。また、派遣期間中に同時多発テロが発生し、現在もイラク問題や北朝鮮問題が大きく報道されています。台北日本人学校の目の前にある台北アメリカンスクールの対応や警備の状況を直接目にすることで、テレビの中の映像が決して遠い世界の話ではなく私たちに繋がっていることを強く実感しました。

日本人学校でも様々な方との出会いから、多くのことを学ぶことができました。様々な都道府県から派遣された先生方との出会い、現地採用の中国語や英語や音楽の先生方との出会い、用務員やバスの運転手や守衛さんたちとの出会い、保護者や学校運営委員会の皆さんとの出会い、そして児童生徒との出会いがありました。

様々な出会いから、日本で生活していたときとは違ったものの見方や考え方、柔軟な発想もできるようなったと感じています。「国境なき世界」、「グローバルな時代」の２１世紀、より一層、各々が、自分の立場で自分ができることを精一杯果たすことと、異なる立場や考え方を認め合うことが重要であると確信します。

今後、危機管理等はじめ、台北日本人学校で学んだ多様な学校運営を生かしながら、「台湾と日本のかけ橋となる人材の育成」また、国際感覚を身に付けたこれからの世界を担う国際人の育成に、全力投球していく所存です。海外の日本人学校に３年間派遣させていただいたことに深く感謝致します。